

黑板

黑板

(本文外の文章)

—印刷されるページは書籍の様式ではありません。

—ページ数はPDF形式のファイルのみ追加されています。

—文章およびデザインは読者のためだけのものであり他に使用されません。

黑板

[教授は広い大講義室の教壇にいる。ゆっくり先程書いた方程式から大きな黒板を消し、その間同時に学生達は声静かに席についている。彼等が静かになるや、話し始める]

— [教授:] おはよう、みんな… 満席の大講義室にいるのは素敵だ—こうやって気分転換に…

[学生達の静かな笑い声が聞こえる。教授は続ける]

勿論、偶然ではない。前回君達に言ったとおり、これは今年度の最後で最も重要な講義、それでもし誰かが「通る」、「その先に進む」希望を持ちたいなら、今日の講義を理解することなしには成し遂げないだろう。

誰もが試験のテーマについてだと考えていると推測している。{微笑む} 多分そうなのだろう。けれど今日は数学について話さない。全員がここにいるよう君達を騙したんだ、何故なら学年度を終

えつつ、素晴らしい討論をしたかった、恐らくもう二度と会わないだろうから。そして何故なら我々はまだ若い—私の目に君達はまだ子供だ。大人達は淀み、骨抜きにされ、身を引いてしまっている。しかし君達は、まだその先に人生はある。喜びと幻滅の人生。希望と恐れ。光と闇の。

さて皆、今日は《価値》について話そう、そして他の《絶滅危惧種》、もしかつて繁栄したのであれば。それで、許してくれることを望む、年度最後の2時間を実用的意味のない何かに当てることを… ただ、少しの無駄な時間を私に委ねてくれ…

さて… 今日の講義は… 《価値…》黒板には何も書かれておらず、チョークには手を付けられておらず、そして沢山の言葉… 誰がこの《無駄な2時間》を始める？

[少しの間誰も答えない。その後一人の学生 {/女学生、性別は無関係} 最初に話し始める…]

《真実》

[教授は最初の文字を大文字で残りを小文字で、黒板の左のどこかに書く。その後、その真下に《誠実》という言葉を書き足す。それから学生達の方に向けて尋ねる]

— [教（授）：] 同義語かね？

— [一人の学生、少しして:] いいえ。

— [教:] 何故？

— [同じ学生:] 誰か誠実に話すことは出来る、けれど真実を無視しています。

— [教授は《知識》という言葉在先程の言葉の下に書き足して再び尋ねる:] 他にどう違う？

— [別の一人の学生が答える:] 深みには…

— [誰か別の学生が述べる:] …私達の中には海洋学者がいます…

[クラスは笑う]

— [教授は、微笑みながら、《深み》という言葉を書き、その後先程の学生に向けて尋ねる:] つまり？

— [学生は続ける…] 誠実は主に日常に関わります。真実は何かより上、何かもっと大きい…

— [教授は《優越》と《大きさ》という言葉を書き、黒板に書いて続ける:] つまり？

- [学（生）：] 普遍的…《そこ》です。
- [教：] そこ、何処？
- [学：] 至る所。
- [教：] それなら何故皆が見ていない？
- [学：] 常に可視的でない…
- [一人の別の学生が付け加える：] 或いは私達の目がぼやけている… 或いは私達の知性が…
- [一人の別の学生が付け加える、笑いながら：] 或いは大気が鈍い…
- [一人の女学生が付け加える、彼女も微笑みながら：] 或いは私達があまり見たくない…
- [教授は黒板上の隣の行に書く：]
《明確》、《明瞭》、《真実性》。
- [その後、女学生に向き直り最終的な所感を述べて尋ねる]
- [教：] 何故我々は真実を見たくない？…
- [学：] ‘厳しい’ からです… より容易く嘘から滑り落ちる…

- [教授は他の学生達に向き直り彼等に尋ねる：] 君達は同意するか？
- [誰か別の学生：] そしてそれが君に付いてくる。私達の選択がいつも私達に付いてくる…
- [教：] それで？
- [学：] この世界では嘘をつくとより多くの友達を持つとでも言うか…
- [教授は《友情》という言葉を書き足し再び彼に向き直り、尋ねる：] 君は持っている？
- [学：] 私達は少しだけ孤独でなくなりませ、そのふりをして。
- [教：] 我々はそうだろうか？
- [その後また学生達に向き直り、そして彼等に尋ねる]
- [教：] 君達は何か意味があると思うかね、我々が埋めているこのリストに？どちらにせよ間もなく消されるリストに。
- [誰か学生が言う、答える代わりに：] 期間。

— [教授は黒板に《期間》という言葉を書き続ける:] ところで、そんな短い間だけのこのリストに何か意味があるだろうか？

— [誰か学生が付け足す:] 本質。

[教授は黒板に《本質》という言葉を書き足す]

— [誰か別の学生が先程の質問に答える:] リストは少しの間だけ、価値は違う…

— [教授は微笑む。その後言う:] そしてもしそれらを適用しなければ？もし我々の内に入らなければ？もし実現しなければ？

— [別の一人の学生が話す:] 《行為》

— [教授は黒板に《価値の実践》と書き、その直後に消して《行為》という言葉を書きながら書く:] 物事を単純にしておくとしよう。[彼の言葉が終わるや、僅かな停止の後《単純》という単語を黒板に書く。]

その後、まだ言葉の数が少ない黒板から離れ、それを見つめて大講義室に向き直りながら尋ねる]

— [教:] 次の言葉は？

— [誰か女子学生が言う:] 愛。

— [教授は言葉を新しい行に書き尋ねる:] 愛とは何だ？

— [誰か学生が答える:] 黒板に言葉が一つ…

[学生達は笑う]

— [別の学生:] 言葉は私たちが与える意味を持つ…

— [教:] 言葉は大抵我々が与える意味より大きい…

— [他の学生 {別.学}:] 愛は捧げ物。

— [別.学:] 愛は理解。

— [別.学:] 愛は偽装された私欲…

— [別.学:] 愛は無私無欲…

— [別.学:] 愛は母乳…

— [別.学:] 愛は全てと同様に一つの商品…

— [別.学:] 愛は愛欲が終わる処から始まる…

— [別.学:] 愛は無垢。

[教授は《無私無欲》と《無垢》という言葉を書き、黒板に書く]

— [別.学:] 愛は捉えどころが無い。

— [別.学:] 愛は幻覚：愛してもそこには無いもの。

— [別.学:] 愛は犠牲。

[教授は《犠牲》という言葉を書き、黒板に書く]

— [別.学:] 愛は私達の周囲にある。

— [別.学:] 愛は深みで眠っている。

[教授は回答の嵐を身振りで遮り、そして付け加える:] いくつか君達がそれに出会うことを願う、そしてその時は大きさと成長さに気付くと… {先程黒板に書いた二つの言葉を指す} しかしながら、与える愛と奪う愛がある。そして世界は常に寛容でも、公正でもない…

[他の言葉の下か新しい行に、《寛容》と《公正》という言葉を書き、言葉が増えてもはや意味は無く再び学生達に戻り尋ねる]

— [教:] 公正も“普遍的”？

— [誰か学生が答える:] でなければならぬと…

— [教:] だが…

— [同じ学生が続ける:] でも人間は客観的ではないし、公平でもない…

— [教:] しかし… [一方で《公平》という言葉を書き、黒板に書く]

— [学:] よく最大の不当が公正と命名された、そして公共の公正に対する理解は常に“公正”ではなかった。人間の歴史は一連の差別で“飾られ”ている…

— [教:] つまり？

— [学:] 肌の色、性別、出身の差別… 人間とその道徳は行為ではなく、誘導された社会的偏見の方向によって判断された。

— [教授は《判断》と《道徳》という言葉を書き、黒板に書き尋ねる:] 道徳とは何？

[クラスは沈黙する。その後誰かが言う:]

— [学生:] 黒板に言葉が一つ…

[クラスは笑う…]

— [誰か別の学生:] 一つの知らない言葉…
[学生達は再び笑う]

— [別.学:] 一つの虐げられた言葉…

— [別.学:] 一つの乱用された言葉… [クラスは笑う]

— [別.学:] 一つの壊滅された言葉…

[一人の別の学生が付け加える:] 自分の好きな言葉では無い…

— [教:] 何故?

— [学:] 何故なら流行ではない… 一つのロマンチックな名残り、一つの過去の残骸… 一つの忘れられた言葉…

— [教:] 何故?

— [学:] 何故ならとても厳しい。何故なら指を振って言う、《これは許されている、これは駄目…》 何故なら人間の本性に反する…

— [教授は黒板の言葉を見つめ続ける:] そう、自然に道徳は存在しない、人間の特性だ。そこで、そう、その動物的本能に反する。しかしその反面恐らくそれが人間を人間たらしめる。もし君が道徳、それとも時代の束の間の道徳を念頭に置いているのか私もそれほど確かでない。顔を、若しくは被っている数十の仮面をもし君が見れば… 大抵、彼等は論駁するに耐えられなかった。周囲と自分自身を欺いて。

そこで、もう一度… 道徳とは何だろう?

— [一人の学生:] 善。

[教授は黒板に《善》という言葉を書く]

— [誰か別の学生が続ける:] 正しさ。

[教授は黒板に《正しさ》という言葉を書く]

— [一人の別の学生が続ける:] 正義… 優位… 明瞭… さっき書いた言葉… それを真実と言うことも出来ます。話す勇気、行動する勇気、生きる勇気、一つのより高い目的に服従する勇気。より良いものが通るために道を譲る勇気。

[教授は黒板に《勇気》、《目的》、《譲歩》という言葉を書く。その後また尋ねる]

— [教:] 道徳は他に何が?

- [一人の学生:] 《動機》。
- [教:] つまり？
- [学:] 行為の裏にある動機。
- [教授は《動機》という言葉を書きまた尋ねる:] つまり？
- [学:] もし動機は与えるものか受け取るものかどうか。動機が‘与えろ’と言ひ、私欲が‘取れ’と言う。
- [教授は尋ねる傍ら、同時に《与えること》という言葉を書き出す:] この二つは入り混じるのでは？
- [学:] 大抵これらが入り混じる時、私欲が勝つ… どれだけそれ自体を喚起しようと。
- [教:] それをどう呼ぶ？
- [学:] 愛、真実、親切… さっき私達を書いた言葉全て。
- [教:] なら動機が全てを決める。もしそれが卑しいなら、我々が書いた言葉全ては偽り。金箔の屑だ。
- [学:] はい。

- [教:] ならどれがこれらの言葉の目的か？
- [学:] 言葉に留まらないこと。
- [教授は黒板の《行為》という言葉の指して尋ねる:] 君達はどのようにしてこんなことが可能か、或いは一つの無駄な骨折りと考えるだろうか？一つの空しい遊び？一艘の穴の開いた船？一つの不変の幻想…
- [学:] 場合によります…
- [教:] 何の？
- [学:] 私達。私達の選択。
- [教授は《選択》という言葉を書き再び尋ねる]
- [教:] 一度？
- [学:] 毎日。
- [一人の別の学生:] でも毎日、その前日を反映して…
- [教:] 我々が変えることを選ばない限りは… [《変化》という言葉を書き出す]

[クラスは黙ったまま。その後学生の誰かが言う:]

— [学:] 休憩の時間だと思います… 私の選択です…

[クラスは笑う…]

— [教:] 今回我々は休憩無し…

— [学生は付け足す:] 全てに休憩はありません…

— [誰か別の学生が述べる:] 全てではない… 人生には無い…

— [そして彼は答える:] 眠りもある…

— [他の学生が彼に言う:] …いつまでも《眠っている》人々のように…

[教授は割って入る…]

— [教:] 休憩はしないが、したい者は好きなだけ休憩出来る…

[その後《自由》という言葉を書き、一方で同時に述べる:] …放埒に戸惑わされないように…

いずれにせよ長くは君達を煩わせないと思う…

— [先の学生が独白で述べる:] これら全て数学と何の関係があるのですか？
実生活において？

[結局誰も講義室から去らない。教授は少しして続ける]

— [教:] 優れているのは良いか悪いか、そして何故？

— [学:] それには答えがありません。それぞれが‘自身’の質によって決めます…

— [教授は《質》という言葉を書き、そしてまた尋ねる:] つまり？

— [学:] 悪人達自身が、何世紀にも渡って、自分達の行為を善と命名した。最悪の犯罪が起き、善の名で血の川が流れた。人々の善、社会の善、神の善。

— [一人の別の学生が付け加える] 最大の嘘、
真実の名において言われた。

— [一人の女学生が付け足す:] 最大の不当、

‘正義’の基板に支えられて。

— [教:] 他に無いのなら、少なくとも、奪われた者達、振りをした者達、善と真実と正義において独占を主張した者達、悪や嘘や不当に仕えたとは決して口にしない者達… 彼等自身すら、そのような自分自身に耐えられなかった… 恐らくこれは優れたものを識別する我々に生まれついた一つの能力の兆候、たとえ我々が従がえなくとも…

— [一人の学生が述べる:] まるで、どこであれ水に沈んでいるような、私達の内ではどの方向に酸素があるのか知っているような、私達の体がその記憶を維持しているような… たとえぼやけて空しく彷徨うとしても、或いは溺れるとしても、結局水面に出ることが無く…

— [教:] 先程我々が言った通り、意味はそれを描写する言葉を越える…

[その後少しの間沈黙する。それから尋ねる]

— [教:] 誰が黒板に次の言葉を付け加えたい?…

— [誰か学生が言う:] 美しさ。

— [教授は《美しさ》という言葉を書き、そし

て付け加える:] 内面的か外面的か。そして皆が優位を知っている…

— [誰か学生が微笑みながら付け足す:] それに届いても、届かなくても…

— [教:] …一つがもう一つを除くことなく…
[短い沈黙の後に続ける…] 何か実用的な価値なしで骨折りと時間の価値があるだろうか?…
一つのマグカップ、同じ仕事をする、どのように作られていても…

— [一人の学生が気付く:] マグカップはその美しさ、そしてその中にある液体で、その価値を評価され… それぞれが、他の必要を満足させる…

— [教:] 物の美しさ、そして精神の美しさ…
それぞれがその輝きを放つ… 星の輝き、そして太陽の輝き…

— [一人の学生が言う:] 自然は美しさに富んでいる…

— [教:] 対称性の経済、そして色の美しさ…

— [別.学:] もし私達の感情がより深く意味を理解するのに役立つなら、そして美しさが感情に影響するなら、その時美しさと芸術は至る処に意

味を持つ…

[教授は《芸術》という言葉を書いた]

— [別.学:] 美の感覚は相対的です。時代によって… 教育によって変わる… 人々は美しさについて同じ判断基準を持っていません…

[教授は《教育》という言葉を書いた]

— [別.学:] 誰もが奥底では作品の質を知っていると思います…

— [別.学:] …多分…

— [教授は先程から黒板にある《質》という言葉を書き、そして付け加える:] もし何かが作られるなら、その創作者にとってせめて出来るだけ美しく作られるように…

[《創作》という言葉を書き、そして続ける:] 結局のところそれぞれが自分自身と向かい合うことになる…

[クラスは黙る]

— [教:] 誰が次の言葉を言いたい?

— [誰か学生:] 信念…

— [別.学:] 信念には価値が無い… 貧しい知識の代用… 過信か信頼のことを言っているのだから… これらのことを言っている?

— [学生は答えない。教授は介入する:] 彼は未知のものについて話したいのだと思う。神について話したいのだと思う。さて、次の質問: 神とは何だろう? 定義不可能なものを定義するとして…

[学生達は笑う。少しの間誰も答えない。その後誰かが始め、そして、複数の声が微笑みつつ増えていく:]

— [学:] 神は愛…

— [別.学:] 神は生成的引力…

— [別.学:] 神は人気商品のブランド…

— [別.学:] 神は昇って沈む太陽…

— [別.学:] 神は万物の具現化されない魂…

— [別.学:] 神は合法的な麻薬…

- [別.学:] 神は我らの無敵の父…
- [別.学:] 神は完全の寓意…
- [別.学:] 神はゲームの終わり…
- [別.学:] 神は謎の答え…
- [別.学:] 神は大いなる不在…
- [別.学:] 神は万物の影…
- [別.学:] 神は我々…
- [別.学:] 神は私達の言い訳…

— [少しの間部屋の中で一つの声も聞こえない。すぐ後に部屋の奥から一人の別の学生が付け加える:] 自分は神が誰だか知っています… でも暴くつもりはありません!

[クラスは大笑いする。落ち着いた時、教授は大きく微笑みながら続ける:]

- [教:] 沈黙の中の知恵:
《…衰退は世界の銘…》
ある詩が言う通り。

[その後《知恵》という言葉を書きそしてクラスに向き直り、尋ねる]

- [教:] 知恵とは何だろう?

[また学生達は答えない。教授は彼等を励ます…]

- [教:] ほら、君達の想像力を使って。

[《想像》という言葉を書き、その傍ら学生達の声が聞こえ始める…]

— [学:] 知恵は少なく語ることでより多くを語る。

- [別.学:] 知恵は不可視を可視化する。

- [別.学:] 知恵は騒音を消す。

— [別.学:] 知恵は知識の夢: 知識は知恵を夢見た…

[教授は《夢》という言葉を書き]

- [別.学:] 知恵は全ての展望。

[教授は《全体》という言葉を書き始める]

— [別.学:] 知恵は人類の希望。

[学生が自分の発言を終えるや、そして教授は《全体》という言葉を書き終えるや、突然の音が大講義室に響く：チョークが折れる音。

学生達は喋るのをやめる。

教授は自分の手元、折れたチョークを見つめる。自分自身に話す:]

— [教:] 十分もった、‘多く’を言わずに。いずれにせよ、間もなく終わるだろう…

[その後、折れたチョークをその手に持ちながら、学生達の方に向き直り、そして彼等に話す]

— [教:] 私の時間は終わった。
もっと多くの言葉を書けたら、もっと少なく書けたら。
私の時間は終わった。君達のは違う。
そしてここで我々の討論は終わることが出来るだろう。それ以上について何らかの理由はない。

しかし多分再び君達に会うことは無いだろうから、去り際に君達に何か最後の一言を残したい気がする—恐らく聞いたことがあるかと…

[彼等を見つめながら、少しの間沈黙する。その後話し始める]

— [教:] 地上にしがみつく一つの種の生物に、一対の翼がもし誰かに与えられるとしたら、もし誰かが得るとしたら、その時には2～3の事態が起きるだろう。

第一に起きるのは、遅かれ早かれ飛ぶだろうということ。

始めは低く、それからより高く。どれだけ高くかは、場合による… 身に付けた翼、その大きさと力による。風による… 上昇気流があるだろう、雲を昇る助けとなる。土壌へと押してくる下降気流または雨もあるだろう。そして常に重力がある。それは彼を着地させる、或いは翼を閉じた折に彼を墜落させる。

[クラスは黙る。彼は続ける:]

一対の翼で第二に起こるのは、得られる特典。

彼は自分の周囲の影から離脱する。この世界の影、数え切れぬ形の。

彼はより光に近付く。

問題と偉業の人々、彼等の習慣と不安は彼にとってより小さく思え、彼等の広い道—彼自身も少し前には歩いていた—彼には狭く思え、氾濫した迷路は牢獄に、そしてその出口は偽物、唯一の出口は上に向かっていたことを今や知っているから。

第三に恐らく起こりうるのは彼が罰せられること。他の者達、大きな集団は、ただ気に留めず、結局、多数は決して視線を高く上げない。誰か少数が喜ぶかも知れない、彼が地平線をすり抜けるのを見ながら。彼等が自分達の歩行に戻る前に。

だが最も深い部分で、或いは明らかに最後には理解するうちの多数は、彼を嘲るだろう。彼に投石するだろう。彼を撃つだろう。そしてもし横柄に対する罰からたまたま彼が逃れるなら、そして一つのより高い世界へと彼に続くよう彼等に呼びかけつつその隣に着地するなら、何人が考えを改

め自分達の翼を付けて彼と飛ぶだろうと君等は思うか？

そして何人が彼の大胆さと未だ彼の目に映る空のことで決して彼を許さないか、彼の接近を彼を殺す一つの更に良い機会として見ないだろうか？

君達はまだ若い。君達の体はまだ重力の崩れを被っておらず、そして君達の眼差しはまだ無限にきらめいている。

君達の翼、準備の出来ていない、未発達な翼は、君達の心臓に血が供給され力を得ることを何よりも待っている。上昇するどの風にも挑む勇気がある。君達の進路と飛行の高さは目の前にある。

太陽を恐れないで。

良い一日を…

[学生達は黙って講義室を退出し始める。

大きな黒板にはかなりの数の言葉がある。
教授はそれを暫く静かに見つめる。学生達は去ってしまっている。その後黒板消しを取り、ゆっくりと隅から隅まで消す。

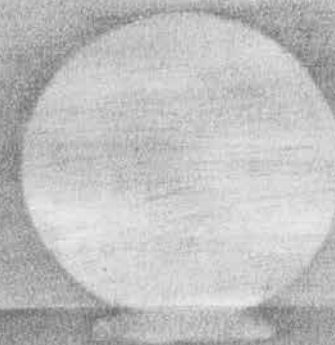
それが済むと黙って講義室を出て、その間に別の学生達が既に入室し始めている。

黒板には何も書かれていない]

イルカとカモメ

(二つの太陽が出会う時、
その時二つの世界は永遠に融合する。)

…海の水面の上にある世界を夢見る一頭のイルカと海底に惹かれる一羽のカモメ。太陽が水に映し出されるその反射に出会う時刻、日暮れに出会い、彼等自身の本性の境界に反して、知識への旅に発つ。



—僕は君のために飛ぶよ…
—僕も君のために泳ぐよ…

私に触れて…

…私たちは一枚の硬貨の二つの面に過ぎない。
あなたのことを話して！なんてもいいから言っ
て！私はあなたのもう片面…

…最初の音階を歌いそして恥ずかし
さに満ちてやめた。誰かに見られたくなかった、聞
かれたくなかった！もっと新しいピアノのための旋
律だった…

…そしてそんなにも青い惑星たちが集
まっているのを見ていたのは初めてだった。白
と青、それらの夢の端に黄色の太陽たち…

…名前も中身もない一冊の本、他の本たちに叫
び呼び寄せていた、涙がその空白のページを溶か
す程に…

青い蝶

(…小さな体に、
大きな羽をまとう全ての者達へ…)

不思議な美しさの一頭の蝶がその目的地へと惹かれてゆく。森の声で豊かになった蝶は印象的な一つの城に入る。一人の優しい王に支配される蝶で彩られた不死の世界。王は彼女を捕え、最も高い塔へ導く。そこには秘められた、壁に無数の額縁、貴重な蝶の最も珍しい収集がある。

王のために庭園で飛ぶか、命を奪われるか、蝶は選択を余儀なくされる。王は得難いものを誰も得られないのを見るよう強いられる…



…ずっと君を待っていた。それら全て以前に、いつか君が来ると心の奥底で感じていた…

The Underworld
— bilingual edition —
12 lyrics

*Back at the playground of our youth,
playing with words, we lost the truth,
Forgot it somewhere in the mud,
while growing old, and growing sad...*

冥界
— 2言語版 —
1 2詩

涼やかな風、若き日々、
公園での言葉遊び、
熱中し、心奪われ、
正しさと間違いも忘れ…

到る処不在
—劇場版&舞台劇版—

人間がまるで、悪には征服し難い、陰謀が欺けない、不当が通用しない砦であるような夢を見た。罰当たりな風には曲げることの出来ない一本の木。それぞれの、一つの太陽-知恵…

不死の山

一生々しい夢を見た、或る声が言う、人の喜びと情熱のより高きところに不死の山がそびえると。誰もその見つけ方を知らない、と私に言う、その頂上に何が隠れているかも… だがその夢の全てが私を上へと歩ませた… 宿命、私が正しく辿ったこの道であり、この山であり、私が探しているもの？

…大地が人間と動物の形を織るのを見る、そして死がそれをほどく。一枚の影と色の織物を見る、織機とその縦糸から逃れようと抗う。知らずに或る形を作ろうと試み、繰り返される機械の雑音越しにある旋律を見つけ出そうと、桴の描く蛇状の罫の上方にある道を…

これらの本、詩と選集の追加 — “全ての若者達へ” の更なる情報を含め —

www.b00k.gr
(二つの『ゼロ』で表記)

にて種々の言語で配布されています…